世田谷村日記

石山修武

三月二四日

朝三時半起床。昨日のメモを記す。今日は四時四五分起床。五時ティー。五時半山を降りる予定。一週間山の冷気の中で眠る事が出来て良かった。今年の夏は沖縄 キルティプール プノンペンのワークショップになるな。金さえ作れれば他に、二人程講師が欲しいのだが、ここまで来てくれる人は少ないだろう。プノンペンの動き方が非常に難しい。取材もあるし、現場を離れるわけにもいかない。トンレサップの河を上って、水上集落まで行ければ良いのだが。小笠原さんのウデの見せ所だろう。

今日夕方プノンペン着、でスケジュールを作らなくては。二五、二六、二七を作業、二八、二九、三〇を休みにして、いやしかし、三日も遊べない。やはり飛行機を使ってアンコール経由でトンレサップだろうか。隣の部屋で清水さんがゴトゴト音を立てている。本当に変な人だなあ。五時半、宿舎のネワール族スタッフに別れを告げて空港へ。六時過カトマンドゥ空港。ジュニー、東京へ戻る人達と別れてネパール航空チェックイン。空港のセキュリティーチェックが厳しいのに驚く。ボディーチェックも二度。何やかやで、フライト時間八時三五分になってしまった。もう目覚めてから五時間経っているのだな。九時前、何故か飛行機はまだ飛ばぬ。眠くなってきた。一時間遅れで離陸。雲の上にでてもヒマラヤはついに姿を見せなかった。しかし、雲の上を飛ぶと言うのも気持が良いものだな。最後の最後にヒマラヤが顔を見せた。反対側の座席の最年長の参加者鈴木さんを呼んで、見ていただく。ヒマラヤにも少しの情はあるな。この光景を見ないで死んではいけない。エアークラフトは南へ飛んでいる光の中へと飛ぶ。大型のジェット旅客機は実に便利を超えた発明物体だよ。只今タイ時間十五時二〇分。中里氏とバンコク空港中のカフェ＆バーでワインを飲んでいる。もう少し、トランジットを過ごす良いスペースが無いものかな。空港中のトランジット・タイムというのは実に現代的な時間、空間のあり方で、そこには情報としては多くがあり実は何もない。空白の時空である。ナショナリティもなく人間は皆通過してゆくだけ。今もこのカフェバーではＣＮＮ放送のＷＡＲ・ＩＮ・ＩＲＡＱを通じ、流しているが、人々はサッカーの放映に気を取られ、ほとんど誰もＣＮＮ放送に関心を示す者は居ない。これが現代の特質だと、ようやく東大出版の原稿の書き出しが決まった。後は早いだろう。十六時四十分バンコク空港三十一番ゲートでＣＮＮＴＶを視ている。十八時半プノンペン着。暑い。空港よりタクシーでウナロム寺院。居ない筈の渋井さんが居た。いつものテラスで九時には眠ってしまう。

三月二五日

六時過起床。昨夜はスコールが来て気温が下がり、過ごしやすかった。ヴェトナムの方角から強い風が吹いたが、おかまいなく熟睡した。疲れている。八時半三階テラス集合、三十分のレクチャーの後ひろしまハウスのレンガ積みを始める。それ程暑くなくて助かる。十二時ＷＯＲＫ休止。水浴びして、洗濯。レンガ積みの先はまだまだ視えぬが、そろそろカンボジアの職人を入れても良いか。ＣＮＮはライブでＵＳ・ＩＲＡＱＷＡＲを終日放映している。情報戦だな。十四時迄昼寝。このゆっくりとした時間の流

し方を東京でも出来ればと思うのだが、やってみれば世田谷村なら出来るかも知れないね。畑いじりと昼寝と仕事が併存しているような生活だ。学生にもディテールは色々ある。バカだとしか思えないような男がレンガ積みは上手で、聞けば国連のハビタでフィリピン研修に参加して、そこでレンガ積みを学んでいたキャリアを持っていたとか、更に聞けば国連のハビタでは身内は信用しろと、つまり国連スタッフは信頼しろと教えられたが、現地人とはキチンと距離をとれと教えられたと言う。驚くべき事だ。国連のディテールはやはり怪しい。又、ハイハイといちいちうるさく答える奴がいて、聞けばやはりガキの頃からボーイスカウトだと言う。鈍い女学生が沢山いて、聞けばマア、女学生だという。バカだねこの類の女は年を取ってもロバのまんまなのだろう。ここの午睡はなにものにも代え難い。渋井修とは思わぬ縁で知り合って、沖縄まで一緒して、これからどうなるかは知れないが、信頼したい。そろそろ公的資金を動かす事を考えた方が良いねコレワ。その裏付けは築いた。十六時四五分ＷＯＲＫ修了。水浴びして小休後、夕食へ。中里氏共々、小笠原氏の昔話しを聞く。十九時三〇分ウナロム寺院へバイクタクシーで帰る。今日はもっと眠れそうだ。二〇時一度起きてＣＮＮＴＶ。ＩＲＡＱ戦争はどんな終わり方をするのかな。二三時前又眠る。今夜は暑い。汗がジワーッとにじんでくる。

三月二六日

六時二〇分起床。雨である。昨夜は風も無く寝苦しい夜だった。今日は午前中の仕事は休みにしようかな。やはり、やろう。その為に来ているのだから。朝食は外に出ないで食べた。九時現場。六人の新メンバーを迎えて、レンガ積みも成果が上がるだろう。昼休み四時間含めて十八時までＷＯＲＫ。学生に疲労の色が濃い。私もそりゃあ疲労の色が濃いい。朝、昼、夕と三回水浴した。千駄木の古本屋夫妻がレンガ積みに参加してくれて、面白い雰囲気をかもし出してくれている。レンガ積みはまだ二日だが、体がもたない。しかし誰もこんな事引き継いでくれる奴は居ないしね。今夜も良く眠れる事だけを望みたい。

三月二七日

昨夜は九時半に寝た。夜中の一時半に眼がさめてしまい、このメモを記している。小笠原氏ＣＮＮＴＶをつけ放しで眠りこけている。徒手空拳で海外に出ていった人達がこうやって帰る処もなく立往生しているのを見ているのだ。私のワークショップも立往生しないようにしなくては。学生達の学習にとっては圧倒的に良いのだが、私にとってはどうか確信が持てぬ。二時又寝よう。六時起床ヴェトナム方向の空の雲が不思議な形にちぎれているように美しい。今日も何とか無事に過ごしたい。朝ゆっくりとする。渋井さん今夜日本へ発つので、少し色んな事を話した。何処かで祝い事があるらしく、唄と音楽が聞こえてくる。十二時十五分レンガ積み修了。微々たるものだが明らかに進んでいる事はわかる。水浴びして、昼食。十五時半より「母の家」最終クリティーク。十八時二十四分プノンペン空港、Ｊ・グライター到着。迎えに行く。夜、ＮＥＷＹＯＲＫ・ＨＯＴＥＬという何ともけったいなホテルの中華料理。小笠原さんのおすすめであったが、何か得体の知れぬ味で、ひどいものだった。小笠原さん、イイモノ喰ってないな、コレワ。腹の具合が少々怪しくなっている。夜中トイレに二、三度通う。

三月二八日

六時起床、さっと支度して空港へ。シェム・リアプへ飛ぶ。八時過の便、プロペラ機である。グライターと小笠原氏は元気なようだが、中里さんが少々疲れ気味。今日一日頑張って貰いたい。私も体調は万全ではない。九時前シェム・リアプ着。空港には渋井さんの日本語学校の学生が待っていて、トンレ・サップ・レークへ直行。乾期のカンボジアはほこりがすごい。トンレ・サップ・レークもこの前訪ねた時と比べると、凄い変わり様で、雨季と乾期の違いを思い知った。湖の大きさは現在150km×32kmで、勿論対岸は見えない。雨季には三倍以上の大きさになると言う。車でひどい凸凹道を湖岸近くまで走り、ボートへ。しばらく狭い水路をゆき、パッと視界が開け湖に出た。凄い水上の集落が展開されており、ここ迄来て良かったと思う。中里氏も完全にグロッキーで車の中で倒れていたが、流石プロのカメラマンだ被写体が良いと起き出して、カシャカシャとっていたので安心する。水上集落の二軒に上らせてもらい、取材した。船の家は一万バーツ程するらしい。ガイドが全部で二〇〇件と言うが、もっと多い。四、五百はある。彼等の二〇％はヴェトナム人で水上生活者の大半は税金を払ってないそうだ。しかし、船を動かせる範囲は決められているそうで、村長もいるし、学校もある。接した人間の人柄も穏やかで開放的であった。台所、洗濯場、ブタ小屋も完備しており、魚の匂いがかなり強くする他は、清潔そうであった。「陸上の生活より楽で良い」との事であった。あんまり、ガツガツ働く人達ではないようだ。自然と同化しながら、自然のリズムの中に入り込んで生きている。飛行機から見た魚の骨状の物体は巨大な網の仕掛けであったようだ。船上の家は実に多様で一つとして同じモノは無い。10ｋｍほどを移動しているようで、一五〇kmあるトンレ・サップ湖を全て使い切って動き廻っているわけではない。意外と律儀なモヴァイル住宅ではあった。三時間程で取材を修了。シェム・リアプに戻る。昼食を食べ、ロッジに宿泊。これはいつだったか泊まった事があるロッジだ。道を挟んだ向うが安い中華料理屋。小笠原さん中々実力を発揮できず、ほんとに車寅次郎だね、この人物は。少し休む。十八時食事に行こうと試みるも、中里さんどうやらダウン。夕食はパスと言う。グライターも頭が痛いというので、前のチャイナ・レストランで簡単に食べて、二〇時前にロッジに戻る。小笠原氏だけ異常に元気。寅さんは疲れないのだ。バカは死なないきゃ直らないと言うのは本当の事だな。しかし、ロッジ前で小笠原氏が作ってプレゼントした、地雷で足を失くした人が、その特別な三輪車を使って、本売りをしているのにあって、彼は感動して泣いていた。全く、どうしようもない位の寅次郎振りで、このバカを振り切ってしまうわけにはどうやらいかないような気がする。この人物とまるまる十三日も一緒にいたのが一番驚きだぜマッタク。こりゃ本物に近いバカだ。山田洋次に会わせたい位。彼はどんな話も自分のささやかに過ぎぬ体験の話しから始める。中国人のメシの喰い方、いつか何処かで一度体験した話しが、いつの間に中国人論になり変なアメリカ帝国主義論になり、日本論になってしまう。認めても良い事は寅次郎同様に相手の地位、肩書きには何の関係もなく、誰にも同じ事を平気で述べる事だ。何の戦略も計略もない。私心を持たぬバカなのだ。私心を持つ客観性が全く無い。Ｊ・グライターが「漫画パースン」というのも、あながち的外れではない。彼の話のほとんどは断言である。「イラクは負けません」「アフガンは立ち直ります」何しろ自分のヒッピー時代の体験を元に、断言を繰り返し続ける。そのしつこさがバカの由縁なのだが、ある一定の品格は無

いわけではない。その辺りの事もまさに寅次郎そのマンマなのである。「チョッと言っておきますけんどね」なんて科白はまさに口振りまで寅次郎そのまんま。おまけに、ひろしと言う同名の舎弟まで居て、これも底抜けの間抜け。もう、こちらの気もおかしくなってしまいそうなのも悲しい。要するにこの人物にはもの悲しさがつきまとっているのだ。六十三才にもなって定職も持たず、帰るべきところもあるようで無い。見果てぬ夢は持つのだが、実現する術は全く持たない。しかし、望郷の念やみ難しで、やっぱり日本に帰りたいのだ。家に帰りたいのだと思う。しかし、それがままならぬ。古びたトランクならぬ、ビニールのクズ袋を下げて、いっぱしの六十三才のヒッピーなのである。今はもう居なくなってしまったヒッピーの化石なのだ。考えなくてはならぬ事はこの人物のバカさ加減と、それでも抜き差しならず厳然と存在する、独特の品位なのである。バカの無心さがかもし出す品位である。

三月二九日

朝五時過起床。昨夜はいつ眠りに入ったのか良く覚えていない。エアコンが効いた部屋が体に慣れていないのだろう。五時四五分中里さんの部屋をノック。まだ調子が良くないので、午前中はここに残ると言う。私も今日はゆっくりやろう。休息のつもりで。六時出発。アンコールワットへ。グライターを案内する。次いでバイヨン。らい王のテラス前の広場の塔でユネスコの日本隊すなわち早稲田隊のメンバーと会う。その後幾つかのルインを巡り、十一時ホテルに戻る。疲れたーア。シャワーを使い小休。アンコール・ワットはもういい。何の感慨も無し。昼飯をゆっくり喰べて午後は休息が良い。フランス料理屋ラ・ノリヤで昼飯。グライターと。小笠原氏はローカルフードが良いと言うので別行動。この昼食はうまかった。ホテルに戻り休む。十六時過ぎオールドマーケットに買物。若干の買物をする。明日は日本に帰る。ネパール・カンボジア・ワークショップの成果をまとめ、次の段階へと進めなくてはならない。四月末に東京で成果発表をやるか。四月末はワイマールへ行かなくてはならぬから無理かも知れんな。十八時過夕食の為に町に出る。中里氏用心してホテルで休む。本当は私だって休みたいんだよ。バイヨンというレストランに行くも、イルミネーション、ピカピカのアメリカナイズされたものだったのでパス。バイヨンは一号店、二号店、三号店まであるらしい。アンコールもアメリカナイズされていくんだなあ。再びラ・ノリアへ。ここの春巻きはうまい。客は殆どヨーロッパ系。日本人は居ない。日本人観光客はアメリカナイズされているって事か。品位に欠けてるよ。バイヨン・スタイルのレストランはほとんど日本人なんだろう。二十一時ホテルに戻る。もう二度とアンコール・ワットに来ることはないだろうが、もし万が一、来る事になったら、ラ・ノリアのロッジが良いね。静かで三十ロッジが独立してあるようだ。明日は五時起床、五時半ホテル発。船でプノンペンに戻る。学生達は無事でいるだろうか。

三月三〇日

三時半起床。荷造り。五時まで再び眠る。五時半ホテル発。トンレ・サップの船着き場へ。プノンペン迄の高速船へは小船で。一昨日取材した水上集落を行く。七時半プノンペン行きの船スタート。室内には入らず屋根の上に陣取る。大半の客がそうしているようだ。風が気持ちよい。トンレ・サップ・レークは対岸も視えず、ただただ荒涼とした中をゆく。五時間ほどの良い船旅であ

った。船の速度に伴う風があったので気にならなかったが、紫外線が強く、日に焼けた。屋上にゴロゴロと皆寝ころんで風を切る風景が面白く写真を何枚もとった。旅の、一時の、かりそめの自由が良く露出していた光景であった。沿岸の水牛やバラック小屋、漁師たちの生活、泥と水にまみれた生活の中を通り過ぎて行く我々。通り過ぎていく至福を何かの形で、返せるようにしたい。直接的には出来なくても、遠廻りしてでも何か役に立つ事をしなくてはと思う。私が最初に出した本は「バラック浄土」だった。今はバラックに浄土を視てしまうような若さは無い。それは卒業した。しかし、どんなに遠廻りしてでも、何処かで彼等の生活、アジアの泥にまみれて、まだ満足に近代化の恩恵に浴していない人々の為になるような、軸が仕事になければ、やはりそれは嘘なのだ。開放系技術の考え方は直接的で短兵急な部分と遠廻りな部分が共存している必要がある。予定通り十三時にウナロム寺院に着く。荷作りして小休。バスで空港へ。何とか参加学生全員無事であったのが何よりだ。六時過のタイ航空でバンコク。トランジット三時間。十二時過ＮＲＴへ。眠りこけているうちにＮＲＴ着。七時過ぎだった。